

初瀬の龍穴と〈如意宝珠〉

——長谷寺縁起の展開・「一山」をめぐる言説群との交差——

藤 卷 和 宏

長谷寺の縁起を語る文献は膨大な量にのほり、その多くが本尊・十一面観音像の完成後、台座となるべき岩盤が山中から出現したことを述べている。

例えば、『三玉絵』下・二十「長谷菩薩戒」の前半部分で語られる長谷寺の縁起譚を見ると、

神亀四年ニツクリ終ヘタテマツレリ。タカサニ丈六尺ナリ。徳道ガユメニ神アリテ、北ノミ子ヲサシテイハク、カシコノ土ノシタニ大ナルイハホアリ。アラハシテ此観音ヲ立タテマツレトイフトミル。サメテ後ニ堀レバ有リ。弘長ヒトシク八尺ナリ。面平カナル事タナ心ノゴトシ。ソレニ立タテマツレリ。

と、長谷寺開基の徳道が神より夢告を得て、台座が地中に埋まっていること、およびその場所を知ったことが語られる。これ以外では、『扶桑略記』所収第二縁起、『今昔物語集』所収縁起、『古事談』所収第二縁起が『三玉絵』を直接、あるいは間接の典拠としており、三書に描かれるこの場面も、ほぼ同様に展開している。

また、『三玉絵』を典拠と見ることはできないながらも、『東大寺要録』や護国寺本『諸寺縁起集』に収録される長谷寺縁起においても、同様の設定になっている。

一方、『扶桑略記』所収第一縁起では、

因茲奉造十一面観音菩薩像一体。高二丈六尺。雷公降臨、破作方八尺盤石。令為其座矣。

と、落雷によって台座が掘り起こされており、『七大寺年表』所収縁起、および『古事談』所収第一縁起が、これとほぼ同様のことを述べる。

さらに、『建久御巡礼記』『諸寺建立次第』各所収縁起に見る台座顕現譚の如く、このふたつの類型を併せたタイプもある。前者では、神の夢告により台座の存在を知り、雷雨がそれを掘り起こす。また、後者もほぼ同様であるが、暴風雨が雷を伴わないこと、神が自らを岩盤の守護神であると述べていることなど、小異がある。

しかし、十三世紀後半の『長谷寺縁起文』（以下『縁起文』）に至

り、この場面は、天龍八部衆および八大童子の威力により台座が掘り起こされるというものと大きく変容してゆくのである。

小稿は、この台座の顕現する場面、および、これに続き童子が行基に台座の靈驗かななることを語る場面から、「縁起文」が龍王に対する信仰を受容していることをまずは示し、それを糸口に、東密系の思想が長谷寺に流れ込んでいることを、室生をめぐめる種々の言説の展開を検討することにより跡付けるものである。

一 天龍八部衆と八大童子、そして龍王

まずは、「縁起文」における台座顕現の場面を引用しよう。

奉_レ造_二十一面_一親自在菩薩像。高一丈六尺。(中略)而感_レ應時
至_二聖人合掌_一。向_二本尊_一發願曰、願_レ得_二冥助_一、忝_レ建_二精舍_一。
其夜夢有_二金神_一、指_二示_一北峯曰、聖人莫_レ患慮_一、據_二峯地_一中、
有_二金剛宝盤石_一。上_レ地際_一齊、下_レ輪際_一窮、其体在三_一枝。枝頂大
悲菩薩坐_レ說法。此其一也。用_レ彼可_レ為_二金剛宝師子座_一。元來
未_レ宜_レ踞、機縁已成_レ矣。吾等神王部類八族。其名曰_二龍神_一、
夜叉、乾闥婆、阿修羅、伽樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、天神王
等_一也。其龍神有_二八類_一。謂曰_二難陀、婆素難、德叉伽、羯固
吒、般摩、摩訶般摩、商佉婆羅、鳩利迦羅、天龍王等_一也。
乃至其天神王在_二十二部_一。謂曰_二伊舍那、帝釈、火光尊、焰魔、
羅刹、水雨天、吹風雲天、多聞天王、大梵天王、持地天、日月
二天、照涼光等_一矣。從_レ往昔_一以降、或現_二本身_一或成_二童男、
擁_レ衛_二此山_一、而如_二天_一普洽_二三率土_一、如_二地_一厚顧_二群生_一。此山
興_レ則形_一而振_レ威、此山衰_レ則幽_一而成_二福云々_一。夢覺畢。

時天平元年己巳歲八月十五日、及_二其夜半_一、天風吹_レ峯、龍王
製_レ電、大雨時降、成_二山崩石破之音_一。心肝不_レ安、纒_二自_一窓間、
見_二電輝_一。天龍八部并_二八大童子等_一、摧_レ殿掘_レ地。不_レ幾_一、夜曉
現_二北峯_一、平_レ如_二掌_一。厥岫嶮中_一有_二金剛宝盤石_一。縱_二広正
等_一方八尺也。其面又如_二掌_一。有_二綾文并菩薩行足_一穴。新像御
足_一比_レ較、敢無_レ違_一。(傍線引用者。以下同)

神が夢にて台座の場所を示し、落雷によつてそれが掘り起こされるという、「建久御巡礼記」や「諸寺建立次第」と同様の展開であるが、ここでは神の「屬性」が明らかにされるといふ大きな相違がある。この神は、従来の縁起では「神」（「三宝絵」等）、「神人」（「扶桑略記」所収第二縁起等）、「靈神」（「建久御巡礼記）、「金神」（「諸寺建立次第」）と示されるのみであり、僅かに「諸寺建立次第」が「吾ハ彼石守護神也」としている他は、その素性については全く語られていなかった。語る必要がなかったのである。神は、台座の場所を徳道に教えるためののみ機能する存在でしかなく、他の場面で再び登場することはない。

しかし「縁起文」においては、最初の呼称こそ「諸寺建立次第」と同じ「金神」であるが、台座の埋まる位置を示した後に、自ら「神王部類」たることを語り、さらに続けて、その部類の中には八類の「龍神」と十二部の「天神王」が存在することを述べる。そして徳道が夢から覚めると、雷鳴と暴風雨の中で、「天龍八部」と「八大童子」が台座を掘り起こしているのである。

「天龍八部」とはほかでもない、「金神」が語つた「吾等神王部類八族。其名曰_二龍神、夜叉、乾闥婆、阿修羅、伽樓羅、緊那

羅、摩睺羅伽、天神王等也」を指している。なお、この天龍八部衆は、「法華経」や「金光明最勝王経」等では、概ね「天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽」の順で示されるが、ここでは「龍神」を最初に持つて来ている。

「縁起文」は、徳道に台座を示した存在を、八類の「龍神」即ち八大龍王を含む天龍八部衆であると設定した。従来縁起にもあつた落雷による台座顕現というモチーフからの連想で、雷神と極めて関係の深い龍神を台座の在処の指示者とした、というだけの説明では不十分であろう。この設定が極めて周到なものであつたことは、後に明らかになる。

ところで「八大童子」であるが、彼らはこの後、天平五年五月二十日の開眼供養の夜、徳道の前に再び姿を現す。

其夜、白衣金剛童子八人、幽然出現。語聖人曰、我等八輩者、宝盤石守護密跡神也。其名云、一岱、石精、護石、青頸、施願、隨念、密跡、施無畏童子等也。

ここでいう「金剛童子八人」は、天龍八部衆とともに台座を掘り起こした、先の「八大童子」と判断してよからう。とすると、ここで「金剛童子」と表記されていることより、「八大童子」とは験門にいう「八大金剛童子」と関係があらうか。その童子たちが徳道に、自分たちは「宝盤石」即ち台座を守護する存在であることを述べているのである。

そして翌二十一日、行基を導師として大般若経供養が執り行われ、明るる暁、聖武天皇は光が殿内に入るといふ奇瑞に接する。その様子を目の当たりにした行基は、信心いよいよ高まり、初瀬

の山に參籠する。そして七十六日目、今度は行基の前に童子が姿を現すことになる。

当第七十六日之申刻、明心清潔、堂内寂寞。其勤自常勇、独折念、心願、觀自在菩薩右脇、忽然現有金色童子。手持金剛独鈷。顔貌絶妙、面少忿怒也。漸歩来、居聖人前。頗奇、問曰、汝、自何所来。童子答曰、我是当山守護八大童子最末金剛使者童子也。

ふたりの問答はさらに続き、童子が初瀬の山の「三世諸仏転法輪地、菩薩聖衆利生所居」たることを行基に語つて聞かせるのであるが、その中で、次のようなことが述べられる。以下、内容に応じて、適宜段落を改めて示す。

①其中、今所、顯之金剛宝石有三枝。上地際分、下金輪束。一枝指、西土、中梵、仏成覺、宝石也。一枝在、清山、補陀落山、觀音所座石也。一枝在、此山、因於靈木、金神示顯也。

②副、其宝石、而左脇在、龍穴、通無熱池。八大龍王并小龍等、守番而來、在大聖左、近護宝座山内、遠治王法國土。

③又天龍八部衆、各上首、八輩、無量眷屬、圍宝座、而守護。亦八大童子、侍從、觀音之右、而為菩薩應化使者。又相去宝座於東西、各三百余步、有二仙宮。数輩仙人、恒時誦誦大乘経、廻向諸衆生。東北隅仙宮隣次、有平坦地。日

域大小諸神、守護宝石之所。

④後、山掘入地中、有十六丈水精宝塔。以七宝莊嚴。其空輪、則齊山頂。是過去千仏、現在七仏遺身舍利、納此中。未來諸仏舍利、又可納此中。是閻浮提福田也。

⑤中ニ於此宝塔并寶石、四方角在三天王、衛護之。東山腰隔河、有鵝形石。天照大神影向而坐彼石上。其石南、有杳形石。春日大明神影向石也。此等神石北谷、又有仙宮。凡不動伏魔而立滝下、天人奉仏而居山頂。

①で述べられる、台座が中天竺の仏成覚の石・補陀落山の観音所座の石と地下で繋がっていることは、すでに「建久御巡礼記、護国寺本「諸寺縁起集」各所収縁起で語られている。台座の聖性を強調するための追加記事であろう。しかし「縁起文」ではそれのみにとどまらず、②で、台座の左脇に龍穴があるとす。龍穴は無熱池に通じており、そこから八大龍王がやって来て台座を守護しているというのだ。それだけではない。③を見ると、天龍八部衆や八大童子、そして仙人や日本中の神々までもが台座を、ひいてはこの初瀬の山を守護していると述べられる。

これに続けて、④舍利の納められた水精の宝塔や、⑤初瀬を守護する様々な神仏の存在に触れた後、「一山内、無非所聖衆修行地。此山則秘密莊嚴之土、群仙窟宅之地也」と締めくくる。そしてこの語りの後、行基は龍穴に入り、童子の語ったことを自らの目で確認することになるのである。

台座顕現譚は、その展開過程において台座に聖性を付与するという方向に傾斜してゆき、その傾きは「縁起文」に至って最高点に達したと言えよう。そのことはまた、「縁起文」において台座の呼称が、「金剛宝盤石」「金剛寶石」「寶石」「宝座」など、従来の縁起になかったものに変化していることから首肯できる。

二 龍穴と水精塔

十一面観音像の完成後に台座が地中から現れるというモチーフは、長谷寺縁起が展開してゆく中で再生産され、そして変容を遂げていった。その過程において、台座への聖性付与のため新たに仕組まれたのが、台座が地下で繋がっている、あるいは龍穴が無熱池に通じている等の説明の挿入である。

従来の縁起ですでに語られている①は、ここでは問題にしない。小稿では、「縁起文」において初めて現れる要素である②以下の記述について検討を加える。

まず②であるが、龍穴の存在を述べることにより、天龍八部衆の一として台座を掘り起こした龍王は、実は無熱池から来たのだということが明らかになる。また、引用部分の後の場面で行基が龍穴巡りをするのはすでに述べた。無熱池に通ずる龍穴、そして龍穴巡り。こうしたモチーフは、その出処をどこに求めたらよいのであろうか。

龍穴説話に関しては、日下力氏によって種々のヴァリエーションが報告されており、この説話が広く享受され、様々に展開している場所を龍樹の浄土（箕面寺秘密縁起）等、あるいは兜率天（諸山縁起）等とするものが多いが、無熱池としているものとしては、この「縁起文」のほかに、空海を開基と語る「阿波国大龍寺縁起」がある。一方、龍穴巡りをする人物は役行者という設定が多いが、ほかに日藏・実忠などとするものもある。

一方、④で述べられる舍利を納めた水精の宝塔は、台座の背後に聳える山の地下にあることだが、これとよく似た記述は、密教色の濃いテクストであり、建長二年（一二五〇）には成立していたことが確認できる。「六一山秘密記」に見いだせる。

此穴中有水精五輪塔。高一丈六尺。此地輪中有二重宮。中宮名竹木目代。上宮周被安水精輪法花経惠果御筆。中宮内如意宝珠入宝瓶被安置之。

両者を比較すると、水精塔の高さを一丈六尺とするか十六丈とするか、および、その中に納められているものを法華経・如意宝珠とするか舍利とするかという相違はあるものの、酷似と言って差し支えない。しかも、「六一山秘密記」でいう「此穴」とは、ほかならぬ龍穴なのだ。「縁起文」は、塔が龍穴中にあるとはしていないが、龍穴と一連の文脈で、この塔について語っている。もちろん、この箇所の重なるの指摘のみで「六一山秘密記」を典拠と断定するというのではない。しかし少なくとも、両テクストの関係は相当に近しいものであろうとの予測は許されよう。

「六一山秘密記」の「六一」とは「室生」のことであり、ここで語られる龍穴とは、有名な室生の龍穴のことである。日下氏の指摘にもあるが、今、「古事談」五・二十四「室生ノ龍穴ニ龍王ノ住メル事」を以下に引用する。

室生龍穴ハ善達龍王之所居也。中略。往年、日对上人、有龍王尊体拜見之志。入件龍穴三四町許黒闇、而之後有晴天。所有一之宮殿。上人立其南砌見之懸珠簾。光明照耀。有風吹動珠簾間、其隙伺見、彼裏玉机上置法花経一部。

日对上人が龍穴に入り、龍王の宮殿を訪れたという。また、本話の末尾に、

折雨之時、於件社頭有說經等事云々。有感應之時、龍穴之上有黒雲。頃之件雲周遍天上有降雨事云々。

とある如く、室生は、古くより折雨の修法が行われる場所でもあった。

筆者は、「縁起文」の「龍穴」という設定は、そこから指呼の距離にあり、なおかつ、古来より有名であった、この室生の龍穴を模していると考えている。

三 室生の如意宝珠／初瀬の〈如意宝珠〉

まず、承平七年（九三七）四月二十三日付の大和国解案である「六一山年分度者奏状」により、室生が龍王信仰の地であったことを確認する。

謹檢旧記云、以去宝龜年中、東宮聖体不予之時、請淨行僧五人、於彼山中、令修延寿法。遂乃鑄愈、玉体安子。

其後、興福寺大僧都賢璟、殊蒙仰旨、奉為國家、創建件山寺也。自爾以降、龍王殿頭其驗、奉為國家鎮護者也。為其山体、四方山峯斜空高聳、龍池穿地深通。久住僧侶□□巖、永忘世虛、修行諸□、□身雲外、遠脱煩累也。寔是神仙遊處、衆聖遺跡也。即以件龍王、為伽藍護法神也。每有旱災、臨龍王之穴地、而祈甘雨。祝言未訖、

雲雨弥降、五穀忽茂、万姓感悅。爰公家每頭靈驗、奉施度者。即去貞觀九年、龍王見叙五位。即詔文云、寺号龍

王寺、神名善女龍王。

興福寺の賢環によつて創建された室生寺は善如(善女)龍王を護法神としており、その龍王は祈雨の対象でもあった。遠日出典氏は、興福寺を中心とする創建勢力と後に室生に流入した東密勢力とが、室生寺を互いに自己の系譜の中に位置付けるべく、新たな系譜を創出していったことを示す。即ち、創建勢力が「古事談」に「件龍王初住猿沢池。昔采女投身之時龍王避而住香山奉山也。件所下人棄死人。龍王又避住室生穴。件所賢懷僧都所行出也。賢懷者、修円僧都之師也」と見える如き、「興福寺一春日一室生」という系譜を作成したのに対抗し、東密勢力は、「今昔物語集」に見る空海が神泉苑で無熱池より善如龍王を勧請して祈雨を行った説話と、空海・修円(守敏)の修法争いの説話とを結び付け、神泉苑の祈雨において空海が賢環の弟子である修円を退けたことにしたというのである。そして、東密勢力によつて作りあげられたこの系譜が、後に「空海が無熱池から神泉苑に勧請した龍王」と「室生の龍王」とが結び付く淵源となるのであった。ここで「一山記」に目を向けてみよう。このテキストは「一山秘密記」と重なる内容を有し、本文中で「是東寺小野秘伝也」と小野流の秘説を伝える書であることが示される。如意宝珠が室生山精進峯に埋められているとの記述に続けて、「神泉園善如龍者、是无熱池龍王之類也。大師勧請之。(中略)同彼山安置之」と述べており、別の箇所では「善女者即一守護、諸仏教授体也」とされている。また、金沢文庫蔵「一山山階寺寛維法備」(建長六年(一二五四)本奥書)など、これとはほぼ同様のことを記す

テキストは多い。古くより室生の護法神であった龍王は、これらのテキストの中で、空海により勧請され如意宝珠の埋まる室生山を守護する存在へと変貌を遂げることになったのだ。

ここで問題となるのは、室生に如意宝珠が埋められており、それを龍王が守護しているという設定である。「一山年分度者奏状」の段階では、如意宝珠などは登場していない。ただ、「大智度論」や「華嚴経」等が説き、「覚禪鈔」にも引かれるように、「龍王一如意宝珠」という繋がりは当然の発想であったのかも知れない。むしろ問題は、その如意宝珠が、なぜ室生山に埋められているのか、ということであろう。

室生の如意宝珠に関しては、「遺告二十五箇条」に言及がある。これは、十世紀末頃に東寺の主張を盛り込み、空海に仮託して成立したテキストであるが、この第二十四条で、「但大唐大師阿闍梨耶所被付属能作性如意宝珠、載頂渡大日本国、勞籠名山勝地既畢。彼勝地者所謂精進峯土心水師修行之岫東嶺而已」と、空海が恵果より付属せられた如意宝珠が、室生の精進峯に埋められていると述べられる(この一文は「一山秘密記」にも引かれる)。

そして門屋温氏は、「遺告二十五箇条」で述べられる、神泉苑での祈雨の際に善如龍王が出現したこと(第一条)と、宝蔵に納まる如意宝珠と海龍王の頸の宝珠とが通じていること(第二十四条)とが結び付いて、「御遺告釈疑鈔」に見る如き、宝珠の由来を説明する二説のうちのひとつ、即ち、空海が善如龍王から宝珠を授かったという新たな解釈が生まれたと見ている。

では、門屋氏の指摘する『御遺告釈疑鈔』(頼瑋、弘長二年(一

二六二)を確認してみよう。これは、中世以降に簇出する「遺告二十五箇条」に対する注釈書のひとつである。「遺告二十五箇条」第二十四条の中の、先に示した一文、即ち、如意宝珠の在処に関する正統的な説をまずは引き、これにもうひとつの説を付け加え、「御遺跡云、室生山堅恵法師竹木目底置在如意宝珠、從善女龍王手_レ得文。相違如何」とし、この質問に対する回答として、両説どちらも認めるというスタンスをとっている。このことは、やや成立の早い「御遺告勸註抄」(尚祚)においても同様である。一方、「六一山秘密記」は、龍穴の中に如意宝珠や舍利が安置されていることを説明した後、

此等即_ハ一山安置_ニ靈宝、大日本国本初也。即_チ大神、金剛童子_ヲ為_シ首、八万四千金剛童子番々_ニ守_ニ護_ニ宝珠、益_ス国土。此即_チ都權現大士也。梵釈諸天、各住_ニ本誓_ニ受_ニ弘_ニ勅_ニ、守_ニ靈宝_ヲ護_ニ。此山_ニ善女龍王等内外諸海龍王龍衆、日夜番々_ニ護_ニ。此山_ニ亦_チ天照大神等日本国中大小神祇九万七千七百余神、面々_ニ守_ニ宝珠_ヲ治_ニ名山_ヲ、守_ニ国家_ヲ治_ニ国土。

としている。如意宝珠を、龍王や金剛童子、そして日本中の神々が守護しているというのだ。これは、第一節で示した「縁起文」の台座の説明記事の②③に一致する。

語句レヴェルの重なりだけではない。「縁起文」において、台座が長谷寺にとつてきわめて重要な存在であることは繰り返して強調されている。一方、室生にとつての如意宝珠の重要性は、「六一山秘密記」のみならず、「六一山記」や「六一山階寺寛釋法橋」、そして「遺告二十五箇条」や御遺告注釈書類等においても、相当

に紙幅を割いて説かれている。加えて、先に指摘した善如龍王から如意宝珠を授かったという説を「縁起文」に重ね合わせてみると、徳道に台座の在処を教えたのが八大龍王を含む天龍八部衆であることも響き合うのである。

また、前節で「縁起文」と「六一山秘密記」との類似箇所において、塔の高さとその中に納められているもの(舍利/如意宝珠)が相違していると述べたが、「大智度論」や「大乘本生心地観経」等が説くように、舍利は如意宝珠に変ずると考えられており、また、「如意宝珠金輪呪王経」には舍利を用いた如意宝珠の製法が見える。六一山をめぐる言説の中でも、舍利と如意宝珠とはしばしば入れ換わり、あるいは併記されつつ展開してゆく。その中で、とりわけ注目すべきは、門屋氏により「六一山秘密記」から秘説を抜き出して伝授に用いたと推測される金沢文庫蔵「六一山龍穴安置御舍利事」である。

六一山龍穴安置八万四千粒御舍利事

此穴中有_ニ五輪塔婆_ニ。其地輪_ニ箱_ニ二重有_レ之。中箱_ニ名_ニ竹木目底_ニ。名_ニ底_ニ等_ニ上箱_ニ之爾也。上箱_ニ開_ニ水精軸法花被_ニ安也。瓶御舍利、二重箱中間瓶_ニ大事被_ニ安。鳥居上箱_ニ中_ニ被_ニ安。上箱_ニ中_ニ臥_ニ被_ニ置。此事不可_レ有_レ外見。可_レ秘_ニ可_レ秘。

ここでは、塔に納められているのが「縁起文」と同じく舍利とされている。この一紙は徳治二年(一三〇七)のものであり、筆者の推測する「縁起文」の成立年代よりは下るが、「六一山秘密記」の当該箇所「如意宝珠↓舍利」という書き換えは、これ以前においても十分可能であったと思われる。¹⁹⁾

このように見てみると、「縁起文」における台座の説明記事は、東密における「一山をめぐる言説群の展開との交差によって作られたと考えることができるのではないか。つまり、従来の長谷寺縁起で語られる台座に新たな聖性を付与するに際して、「縁起文」は、これを室生における如意宝珠と同等の扱いをすることに、最上級の威光を与えることに成功した。換言すれば、ここに至って台座は、初瀬の（如意宝珠）となったのである。

さらに、「長谷寺密奏記」（以下「密奏記」）に目を向けてみよう。これは、「縁起文」を本地垂迹説により裏付け、表裏一体となつて機能することにより、長谷寺をめぐる神仏關係を表徴するテクストである。地中に埋まり光を放つ台座の許で勤行する徳道の前にひとりの翁が現れ、「我者は礼手力雄明神也」と名乗り、天照大神の託宣を授ける。その言葉の中で手力雄は、徳道の前身が役行者であることを教える。

然爾思惟聖人前身須留爾、元登役優婆塞登志天修此行此一代峯之時、南頭於此豊山峯一天、扱勝地一天発精舍建立之願。須。行者兼天不果志天没世武古登乎知天、終仁為訓其願仁、入法界体性三昧天分身志天、聖人來于此山留。

精舎建立の志を果たせなかつた役行者は、徳道に転生して初瀬の山に再び現れたのであつた。

爰仁聖人弥発願志天、欲建伽藍於此地。須。敢天未擬本尊。只欲奉頭神御本地。然而登毛、天照大神尊野御本地不軌志天、習比願留多志。聖人為祈請、彼御本地、參籠伊勢国五十鈴河上磯宮。須。終仁滿三百日。須留文武天皇即位十年丙午

九月十五日戊戌爾、於神宮荒御垣御門外一天、奉資法樂留。于時著天爾無雲久月光殊仁朗也。而仁御宝殿前爾現一日輪。須。其中爾立像十一面觀自在菩薩影向志天、放光知成明。須。（中略）遙爾拜日輪中之像。須留爾、心歡喜志天知其御本地留。聖人重奉拜見彼權門、發祈念須留爾、果志天不常之貴女來天、咲喜天告天曰久、我礼陰爾居須留發幾者、秘密莊嚴大日如來也。我礼陽爾出留發幾者、報身万徳盧舍那如來也。然而登毛、依恨太人諸人天問天岩戸、為弘法道仏道仁開天岩戸。

徳道は天照大神の本地を祈り頭すべく伊勢の磯宮に參籠する。すると、十一面觀音が影向し、さらに天照大神が貴女として現れ、自分は天日であり、盧舍那仏であると語る。天照大神は、仏法弘通のために天の岩戸を開いたというのだ。

こうした二連の記述は、「一山秘密記」の冒頭近くで述べられる、
国号名大日本国。此国中有二名山、号一山。山中有二精進峯。其峯嶺在一顆之宝珠、号大精進如意宝珠。此铁塔流伝、三国相承靈宝也。是大日如來心肝、諸仏菩薩通三昧耶形也。此宝珠即大日遍照全身、慶敷三昧惣体也。故国名大日本国也。此宝珠垂跡、神道名天照大神。故天照大神天石扉開、一巖幅、諸神同等出宇多郡給。

と一致している。長谷寺において台座が顕現し、そこに天照大神の本地である十一面觀音が本尊として据えられるという設定は、如意宝珠の垂迹である天照大神が、天の岩戸を開いて室生に現れ

たことの焼き直し、あるいは「長谷寺的」変容であつたのだ。

また、「密奏記」において徳道に天照大神の託宣を授けたのは、先にも述べたとおり手力雄であるが、「一山記」や「一山山階寺寛維法橋」では、手力雄が俱利迦羅龍王であるとされている。

神泉蘭善如龍者、は無熱池龍王之類也。大師勸請之。即金色長八寸許也。乘長九尺蛇頂來。即実恵、真濟、真雅、堅惠、真暎、真然等見之。同彼山安置之。西有龍池。即表無熱池南面之相。東有龍穴。頭は無我空相。中央有御玉殿。神云俱利迦羅大龍雷電神。或名大力辛雄神。

これにより、俱利迦羅龍王を含む八大龍王が台座を掘り起こしたという「縁起文」の記述と、手力雄が徳道を天照大神の本地・十一面観音へと導いたとする「密奏記」とが、無理なく繋がるのである。

見てきたように、東密における一山の如意宝珠と龍王をめぐると言説の影響は、「縁起文」のみならず「密奏記」からも指摘することができる。

*

如上、東密における一山をめぐる言説を粗々たどり、長谷寺縁起の台座顕現譚の展開との接点を求めてみた。

一山の如意宝珠は密教事相にも登場し、さらには神祇灌頂・即位灌頂という問題にも展開してゆく。また、これらに言説を生み出したのは東寺を中心とする真言僧たちであると思われるが、こうした動きと室生寺との関わりなども詳細に検討する必要がある。

ろう。ほかに、中世における室生寺と長谷寺との人的交流なども不可避の課題である。

室生寺においては多くの資料が散佚してしまつたのか、伝存するものは甚だ少ない。そうした資料的制約のある中で、延享四年（二七四七）に従来の縁起を集成して成立した「室生山縁起」は、後代の資料ながらも貴重な存在である。一方、金沢文庫には室生寺関係の資料が多数収蔵されるが、その大部分は室生に入山して付法を受けた称名寺二世・銀阿がもたらしたものである。これらのテクストを詳細に読み込んでゆく作業が室生寺研究に資するところ大であるのは言を俟たず、また、中世における室生寺と長谷寺、東密と長谷寺との交渉を論ずるうえで、きわめて重要であるといえよう。小稿は、そうした作業に着手するための準備運動の試みでもある。

【底本】「縁起文」は長谷寺豊山文庫蔵・室町末期写本（国文学研究資料館マイクロ資料）を底本とし、対校本は同文庫蔵・寛文十年写本（同前）、松平文庫蔵本の二写本、および群書類従等の活字本。「密奏記」は金沢文庫蔵「長谷寺司等謹勸言上」を底本とし、対校本は尊経閣文庫蔵「長谷勸奏記」、内閣文庫蔵「長谷寺密奏記」、成實堂文庫蔵「長谷寺秘蜜記并炎上供養事」。「一山秘密記」は随心院蔵本を底本とし、対校本は彦根城博物館蔵本（国文学研究資料館マイクロ資料）、善通寺蔵本（同前）、高野山大学図書館蔵本（光台院・金剛三昧院・三宝院・真別処の寄託本）等を用いた。

これ以外の底本は以下の通り。「三宝絵」↓新日本古典文学大系、

『扶桑略記』→『新国史大系』、『建久御巡礼記』『諸寺建立次第』→
 校刊美術史料、『古事談』→現代思潮社版、『六一山記』→統群書
 類從、『六一山年分度者奏状』→西田長男氏校訂本(『日本神道史
 研究』4)、『遺告二十五箇条』→弘法大師伝全集、『御遺告釈疑
 鈔』→続真言宗全書、『六一山龍穴安置御舍利事』→金沢文庫
 藏、『寛辨鈔』→大日本仏教全書、『秘録』→中野莊次氏所
 蔵文書(東京大学史料編纂所写真帳)。なお、引用に際しては表記を
 私意にて改めた箇所がある。

- 注(1) 藤巻「長谷寺の縁起——再生産と変容の様相——」(『解釈と鑑賞
 63・12/平成10・12』)。
 (2) 藤巻「長谷寺縁起文」天照大神・春日明神誓約譚をめぐって
 ——第六天魔王の登場と「長谷寺密奏記」との照応——(『国文学
 研究』17/平成11・3)。
 (3) 列挙される八大龍王の名称は、『陀羅尼集経』の表記と一致する。
 (4) 長谷寺の八大童子については、内閣文庫蔵『豊山法起院中興記』
 に引かれる「長谷寺八大童子秘記」で詳述される。
 (5) 中天竺の仏成覚の石は、「建久御巡礼記、護国寺本「諸寺縁起
 集」では摩伽陀国の金剛座の石とされ、三世諸仏がこの石に座し
 て覚を成すという。
 (6) 日下力氏「竜神信仰の視点から」(『平治物語の成立と展開』/汲
 古書院/平成9・6/初出は昭和55)。
 (7) 彦根城博物館蔵本の本文書による。
 (8) 南北朝期の「太鏡底容鈔」「春日秘記」等にも似た記述を見いだ
 すことができるが、これらのテクストと「縁起文」「六一山秘密
 記」との関係は未詳。
 (9) なお、机上の法華経と、先の「六一山秘密記」で如意宝珠ととも

に安置される法華経との関係は未詳であるが、一脈通ずるものが
 あるのかも知れない。

- (10) 遠日出典氏「中世に於ける室生山内の変質」(『室生寺史の研究』
 /巖南堂書店/昭和54・11/初出は昭和40)。
 (11) 前節引用箇所の中略部分に当たる。
 (12) 成立は「六一山秘密記」とほぼ同時期であろうか。遠日出典氏は
 「中世室生山の思想的発展——室生流神道に触れながら——」(注
 10)著書収録/初出は昭和46)で、鎌倉初期に「六一山秘密記」に
 先立つて成立したとする。
 (13) 真言寺院の伝授目録等に類出する「六一山」の語を表題に持つテ
 クストもこれに類するものと思われる。また、それ以外の東密系
 のテクスト(例えば高野山縁起類等)でも説かれることが多い。
 (14) 後には、神泉苑の龍土が室生に移り棲んだという所説(室生寺蔵
 『室生山縁起』等)も現れるが、堀池春峰氏は「室生寺の歴史」
 「六一山図と室生寺」(『南都仏教史の研究』下/昭和57・4/法
 蔵館/初出はともに昭和51)で、これとは逆に、神泉苑の善如龍
 王の名は室生の龍王に倣ったものであるとしている。いずれにせ
 よ、室生と神泉苑の間には強固な観念連繫が存在していたので
 ある。
 (15) 門屋温氏「六一山土心水師」をめぐって(『説話文学研究』32/平
 成9・6)。
 (16) この製法は「遺告二十五箇条」第二十四条にも引かれている。
 (17) 「室生山御舍利相伝縁起」「文永九年覚日房入宇一山事」等は舍利
 が埋められているとしており、「六一山記」「六一山秘密記」等におい
 ては、舍利・如意宝珠がともに埋められているとされる。
 (18) 門屋氏注(15)論文。
 (19) 七世紀末から八世紀初頭頃の作とされる長谷寺の「銅版法華説相
 図」の銘文に「奉為天皇陛下、敬造千仏多宝仏塔。上措舍利、仲擬
 前身、下儀並坐」とあるが、「塔の中の舍利」というモチーフは、

あるいはこの一文からの影響も想定できるのではないか。

- (20) 「一山をめぐる言説」以外からも、例えば「縁起文」の徳道護生場面と「遺告二十五箇条」第一条の空海誕生場面とが類似しているなど、「縁起文」と東密の近さが窺える。

- (21) 阿部泰郎氏「長谷寺の縁起と靈験記」(『仏教民俗学の諸問題』仏教民俗学大系1/名著出版/平成5・3)、および藤巻注(2)論文、同「長谷寺縁起文」に見る(『東大寺』——役行者・法起菩薩同体説と伊勢参宮説——)(『説話文学研究』34/平成11・5)。

- (22) なお、如意宝珠と天照大神との結合は、東密の道場観に拠っていると考えられる。例えば「寛禪抄」「宝珠又説」では、「地結之上金剛壇内有大海。海中有須彌山。其上有龕宇。成蓮花。上有瓊字。成月輪。其中有曇字。变成舍利。々々变成如意宝珠。是即大日如来三昧耶身也」と、如意宝珠は大日の三昧耶身とされており、これが天照大神・大日同体説を媒介として、両者を結び付けるに至ったのであろう。

- (23) 第二節で述べたとおり、日下氏の指摘する龍穴説話の中には、役行者が龍穴を巡るといふタイプのものが多い。一方、「密奏記」では徳道に龍穴巡りをさせていないことに対して疑問を投げかける向きもあるが、このことは「縁起文」の龍穴巡りが役行者系の龍穴説話でなしに、室生の龍穴を模していることの傍証となりうると考えている。また、推測であるが、行基の龍穴巡り(龍穴中で水精塔の舍利を行基が見る)は、文暦二年(一二三五)の行基舎利の出現(生駒山竹林寺縁起)「行基菩薩御遺骨出現事」「百鍊抄」等)によつて高まつた行基信仰・舎利信仰を踏まえることにより読み解くことができるのではないか。

- (24) 参考までに、冒頭に「大日本国大和州宇多郡一山秘口決、東寺真言門葉相承之大事」と記す「秘録一山」(正和五年(一二三六)本奥書)では、「伊勢大神宮伊勢ケウガフチニ住給。大力辛明

神門守住給。善如大龍王鎮住彼山中心、殊更守護仏法給」とされている。なお、初瀬における手力雄信仰に関しては、藤巻「長谷寺密奏記裏付」五神鎮座譚の成立——伊勢の神から初瀬の神へ——(『国語と国文学』77・2/平成12・2)で触れた。

- (25) 釵阿と室生寺との関係については、久保田収氏「中世神道の研究」(神道史学会/昭和34・12)、柳田良洪氏「真言密教成立過程の研究」(山喜房仏書林/昭和39・8)、納富常天氏「室生寺と金沢称名寺釵阿」(金沢文庫研究242・243合併/昭和52・1)、牧野和夫氏「太子伝と中世日本記——秀範・真空——」(『解釈と鑑賞』64・3/平成11・3)等に言及される。